

ビッグデータ(ETC2.0データ)を活用した生活道路安全対策とは

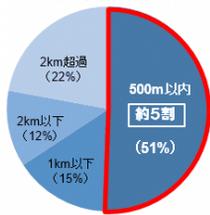
○生活道路が抱える問題と背景

交通事故の死者数は大幅に減少しているものの、生活道路の交通事故は減少割合が小さく、また、自宅から500m以内の身近な道路で事故が多く発生している。

自宅周辺の身近な道路は、買い物や送り迎えなど、普段の生活に沿って使われるべきところが、40、50km/hと速い速度で抜け道利用している車が多く見られ、歩行者や自転車が日常的に通行するうえで、事故が起こるリスクが高くなっている。

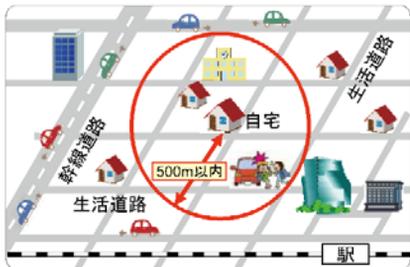
人と車が衝突したとき、車のスピードが30キロを超えると、死亡率が急激に上昇するというデータもあり、重大事故を減少させるためには、生活道路における車のスピードを30km/h以下にすることが、重要となる。

【自宅からの距離別死者数割合】
(歩行者、自転車)

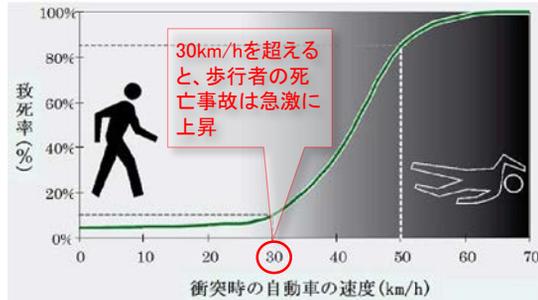


全1,870人
(平成28年)

出典：国土交通省資料



→ 身近な道路を安全に



出典：世界保健機関
速度マネジメントに関する報告書

○ETC2.0ビッグデータを活用したデータ分析

国土交通省が所有するETC2.0ビッグデータを活用することにより、速度や経路などのデータを得ることができ、地区における課題を定量的に分析することができる。

「ETC2.0」とは

高速道路の自動料金収受及び実際に走行している自動車のデータとして、挙動データ（急減速、急ハンドル）、速度、経路データが収集できるシステム



■車載器 (R2.3末時点)
約493万台

路車間通信



カーナビ GPS

ETC2.0プローブデータの蓄積



○ドライバー

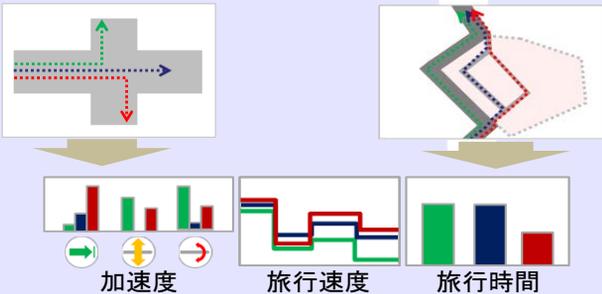
安全運転支援、渋滞情報を提供



○道路管理者

分析活用イメージ

【交差点部】直進右左折別に挙動、走行速度の状況を分析
【生活エリア】走行経路別に挙動、走行速度の状況を分析



交通安全対策内容

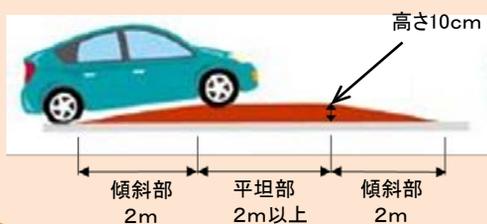
対象地区の課題をETC2.0ビッグデータによって定量的に分析することにより、対応方針や対策内容が決定される。以下に主な対策内容を示すが、これらの安全対策を行うことにより、注意喚起や速度抑制効果が期待でき、生活道路における安全対策に繋がっていく。

主な対策内容の例

種類		安全対策メニュー			
		()内は安全対策の目的			
施設整備	物理的デバイス	ハンプ、交差点ハンプ (速度抑制) 	狭さく (速度抑制) 	スムーズ歩道 (速度抑制、流入抑制) 	防護柵 (物理的な分離) 
	簡易対策	カラー舗装 (交差点部の注意喚起) 	カーブミラー (事故防止) 	グリーンベルト (注意喚起) 	ポストコーン (速度抑制) 
交通規制	ゾーン30	ゾーン30 (速度抑制) 	最高速度規制 (速度抑制) 	一方通行化 (流入抑制) 	一時停止規制 (事故防止) 

ハンプ・交差点ハンプ

道路上に台形状の凸部を設置することにより、車の速度を低下させる



スムーズ横断歩道

横断歩道の位置に「ハンプ」を設置することにより、横断歩道が歩道の高さまで上がることで、車両の速度を低下させ、歩行者が安全に横断できるようにする

